

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



## 第1回

### ごあいさつ

これまで『知的障害教育の開拓者セガン〜孤立から社会化への探究』（新日本出版社、2010年）、『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミューン』（幻戯書房、2014年）で、「セガン」を綴っております。この「昔ばなし」は、前二作で十分に綴りきれなかった「セガン」の人間性のコアとなるだろうところに焦点を当て、史料を新しく求め、セガン自立論とも呼ぶべきテーマを建てて語っていきます。史資料的に限界に及びますと、この「昔ばなし」は終結いたします。

それではよろしくお付き合いのほどをお願いいたします。

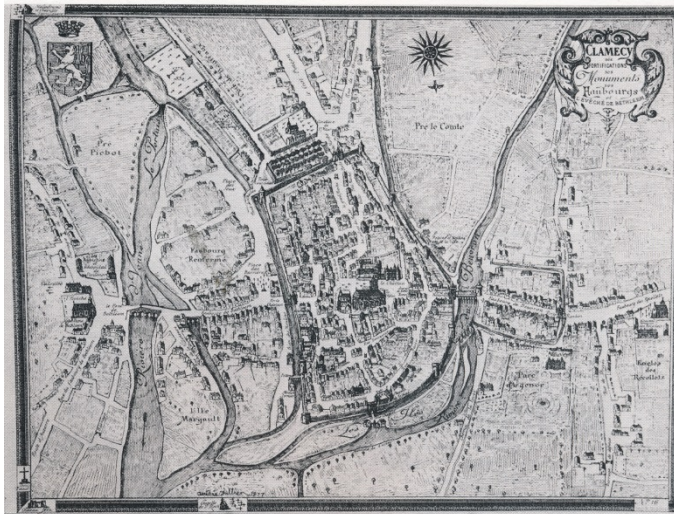
### 父素性のこと



父親が役場に届けた名前はエドゥアール＝オネジム・セガンといます。この話ではただの「セガン」とだけ呼ばせてもらいます。写真はセガンが38歳で妻・子ども一人を伴ってアメリカ合衆国に渡

った時のパスポート写真を元にして、画家に画いてもらった油彩画のコピーです。どうですか？なかなか果敢な表情をしていると思いませんか？カラーでご紹介するのは本邦初公開！

1812年1月20日生まれ、フランスのナポレオン第一帝政の時代です。ところはフランス帝国ニューヴェル県クラムシー・コミューン。フランスの中部で東寄りになります。ヨヌヌ川とブヴロン川との合流地点で、中世に築城された城郭都市を街の起源にしています。人口は今で3000人ほどの小さな地方都市です。産業は今これというものがありませんので「村おこし」に必死になっていますが、セガンが生まれた頃はけっこう賑わっていたんだそうです。その賑わいの話は後に回させてもらいます。下の図版は城壁で囲まれていた頃のクラムシーです。これ、ちょっと珍しい図版なんですよ。ヨーロッパの中世の城郭都市の特徴をよく表しています。セガンのご両親が住んでおられた頃もこんな案配だったようです。



父親の名前はジャック＝オネジム・セガン、母親の名前はマルグリット・ユザヌ。ずいぶんと歳の差のあるご夫婦だ

ったようです。ジャック＝オネジムさんは医学博士さま！小さな村の博士さまですから、そりゃあもう、名士ですね。こんな小さな村でも上級役人や元貴族、金持ち、そして学者・お医者さまたちハイソ・グループはよく晩餐会を開いていたようです。ジャック＝オネジムさんはこの村の生まれ・育ちの人ではなかったし、奥方のマルグレットさんも他の土地から嫁いできた人ですから、古い昔のこと、村八分にされかねませんから、晩餐会みたいにお金のかかることは、勢い込んで主催したんじゃないですかね。この晩餐会がセガン家で開かれてます。会費制？冗談じゃございません。どれだけ豪華に演出できるかが、その地域での評判になるのですから、もちろん、主催側の持ち出しですよ。まあ、優れた腕の料理人の手配能力、暇と金、それとダンス・パーティーができるほどで、しかもきらびやかな装飾が施されている広間がなければ、できませんね。ついでに言っときますが、行政主催の晩餐会もあるんですね、それに呼ばれるかどうか、呼ばれなかった日には、名士集団からドロップアウトさせられるわけです、そうならないためにも、市井の晩餐会の主催や参加はせつせとしなければならないわけです。クラムシーが生んだセガンより10年上の世代のクロード・ティリエという文学者がこういうことを名文で書いておられます。

右の写真はクロード・ティリエの胸像。クロード・ティリエはクラムシーが誇る人物の一人なんです。ぼく＝この話の案内人が2005年3月初旬にクラムシーを訪問した時、一人のご婦人が「この



人を知らずしてクラムシーを語るなかれ」とばかりに、ぼくにクロード・ティリエについて2時間ばかり、とくとくとお話し下さったのですよ。話のついでに、この日、つまり2005年3月4日に綴ったぼくの日記を紹介しておきましょう。

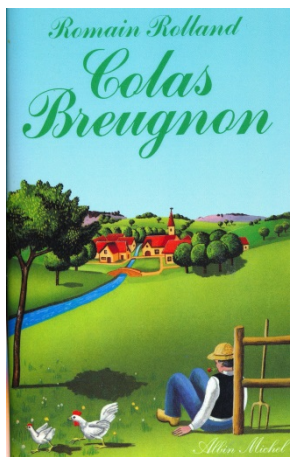
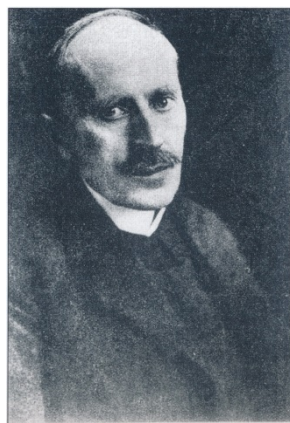
「午後4時頃、クラムシーが生んだ大衆小説作家クロード・ティリエ(1801-1844)友の会(Association des Amis de Claude TILLIER)会長氏による、クロード・ティリエの簡単な生涯についての説明を得る。ティリエの生家はセガンの生家のすぐ近くである。ティリエについての説明は、19世紀前半のクラムシーにおける教育状況についての理解を深めることができるだろうというクラムシー科学芸術協会(学芸協会と略称)のご配慮による。ティリエはリセ就学の後パリで補助教員を2年間務めた後、クラムシーに戻り私立学校を開設。すぐ兵役に取られスペイン戦争に従軍。肺をやられ7年間の義務兵役を終えることなく5年間で退役。再び私立学校を開設。ここでの教育成果が認められコレージュの校長に迎えられる。カントン(小郡)の教育監督委員会委員を務める。反体制的であったため罷免される。三度<sup>みたび</sup>私立学校を開設するが、アナーキストのシンボルである黒旗を掲げるなどのためブルジョアたちから強い反感を買い、経営難に陥り、独力で新聞'la Association'を発行、同新聞に大衆小説を掲載し、評判を呼ぶ。しかし、同紙は抑圧を受け発行が困難となった。病気のため1844年没。」

話を戻します。

街の新規参入者は本当に必死だったでしょうね。いくら医学博士という肩書きを身につけていても、街の医者として受け入れられなければ、なんにもなりません。上流階級の社交界がまだまだ大きな力を持って地域を動かしていた時代に、

父母が地域に溶け込むために汗水流して社交に勤しんでいたその時代に、結構、言ってみれば因習的な時代社会に、セガンは生まれたわけです。

こぼれ話ですが、1840年9月5日の日付ですから、セガンがとくにパリで一働きしている時のことです。セガン家で



晩餐会が開かれています。その様子をせっせと綴っていた、これまたクラムシーのコミュニケーション長を勤め上げたことのある名士がおります。彼のひ孫がかの有名な文学者で民主主義闘士のロマン・ロランです。写真左の人です。セガンより50年後の時代の人なんです、ロマン・ロランは。この記録魔名士ジャン＝バプティスト・ポニールさん。なかなか名物男だったようで、ロマン・ロランの作品『コラ・ブルニオン』の主人公老家具師のイメージモデルだったそうです。左の写真は『コラ・ブルニオン』のペーパーブック新装版です。16世紀農村ののどかな光景ではありま

すが、貧困を示す赤い屋根の民家群はともかく、教会塔がこの文学の舞台となっているクラムシーの教会、<sup>サン</sup>聖マルタン教会の塔の形とは違います。尖塔ではなく四角い塔なのです。

さて、セガン家で晩餐会が開かれた。それをせっせと記録

した名物男がいた。その男はロマン・ロランの曾祖父、つまり、ひ爺さまだった、そしてロラン姓ではなく、ポニール姓。もちろん、ロマン・ロランはまだ生まれていない。こういう関係を、「セガン家とロマン・ロラン家は親交があった」(清水寛)って、言うんですか?セガンは、ロマン・ロランと同じクラムシーの生まれである、ということだけです、共通するのは。でも、クラムシーの宣伝になっても、セガンの人生史にとっては、なんの意味もないと、ぼくは思います。

そうそう、家族関係で言っておかなければならないことがあります。きょうだいは2つ下の弟と10歳年下の妹とがいたこと、弟はパリに出て医学を学んで医学博士になったこと、妹は公証人と結婚をしたことは分かっていますが、それ以上のことは、分かりません。ただ、この妹の結婚にあたって、セガンは立会人の一人を務めています、肩書きに「弁護士」と名乗っています。1841年のことです。それから、セガンの父母は、1870年、1871年に相次いで亡くなっています。土地家屋は、死後直ちに、オネジム＝エドゥアールに財産分与され、これまた直ちに、他者の手に売却されています。

クラムシーのセガン家は、この地域の由緒ある名門医師の家系だと言われてきましたが、クラムシーの名士で医学博士のジャック・オネジム・セガン家はたった一代限りのことでした。それにしても、初代ジャック＝オネジム、長男オネジム＝エドゥアール、次男ジュール、セガンの息子エドワード＝コンスタンス、この人たちみんな医学博士さま。

アメリカでは息子一家を襲った「セガン家の悲劇」が語られており、セガン一家の栄光はそれを限りとするのですが、それは別の方が触れられることでしょう。ぼくはあくまでもフランス時代に焦点を当てて「セガン」物語を綴ります。